

研究報告

内田寛一著

近世農村の人口地理的研究

評書

浅井 得一

故内田寛一博士の畢生の偉業であり、またその学位論文（昭和三十四年・日本大学）ともなった『近世農村の人口地理的研究』の上梓は、学界のためにかねてから御遺族及び先生の教えを受けた者や先生に私淑した者の切望するところであったが、その量の歴大なこと、多くの複雑な表や図表が含まれていること、また学問的にはきわめて価値の高いものであるが、必ずしも一般向けを期待できない内容のものであることが、それを著しく困難にしていた。このたび、「正しい日本国民としての代表者をつくり上げるという意気の下にその学制の実現方に献身的な御骨折りをいただいた」（柴田徳次郎総長序文）先生の晩年にとって最もゆかりの深い国士館大学地理学教室の方々のなみなみならぬ尽力と、大学当局の多大の援助によって、御遺作が世に出ることができたのは、先生にひとかたならぬ御世話になったもの一人として、大きな喜びであり、浅学非才まったくその任でないことを知る者であるが、あえて紹介の筆をとらせていただくಿದೆである。

先生御自身も序説の「本研究の動機と目的」において述べられているように、「わが国の人口総論については、古来これを研究し、発表した人も少なく

ない。」が、「個々の農村をサンプリングして共通点を抽出しようとする」先生の意図からいえば、あまり参考にならないもので、近年漸く学術誌上に個々の農村の戸口に関する記事が掲載され出したが、「それはたいいて戸口の研究を主とせず、またたまたま宗門人別改帳を扱ってもその記載事項を資料として提供してあるといった態のもので」、これも先生の志しておられた方向とはほど遠いものであり、したがって先生の研究は日本では前人未踏の領域であるばかりでなく、外国にもほとんど先例のないものである。

資料とされたのは、主として宗門人別改帳で、そのほか検地帳・人数書上帳・人数増減帳・村鏡（村明細帳）・村書上帳なども参考にされている。先生御自身、第二次世界大戦前からこれらの資料の蒐集につとめられ、一部は整理もされていたが、その大部分は自宅で、戦災に罹り、わずかに東京文理科大学の研究室にあったものが災害を免れた。これは先生にとって痛恨事であったが、先生は残された資料原本と整理簿をもとし、また乏しい研究費をやりくりされて、新しい資料の探訪・購買を試みられ、戦後十数年を経て、この研究をまとめられたのである。もし戦災という不幸なことがなければ、この研究は

あるいはもっと早く、内容もさらに豊富に完成したであろうことを思うと、先生の悲痛な心情を察して余りがある。それは先生が、折りにふれて、「もしあれが残っていたら」とわれわれにもらされることがあって、われわれはよく承知していたのである。

宗門人別改とその記録である宗門人別改帳は、わが国独特のものである。宗門人別改の目的とするところは、キリシタンの探索にあつて、国勢調査ではなかったが、その記載事項からいえば、国勢調査に準ずるものであり、その調査の結果は、従来一般に考えられたよりもはるかに信頼できるものであつて、わが国における人口調査が欧米の先進国よりかなりおくれて、ようやく明治時代に始まつたというような考え方は必ずしも妥当でない。しかもそれは毎年確実に行なわれ、帳簿として提出されたものであつて、この点ではのちの国勢調査のように数年おきというのとは違い、微細な変化をもがさずとらえた資料となつていたのである。先生も「わが国では、欧米に倣つた国勢調査は大正九年（一九二〇年）に始めて実施されたのであるが、宗門人別改は既に二百数十年前から実施されて、……国勢調査が米国では一七九〇年に始まり、英国では一八〇一年に始まつたのと対比すれば、わが国における全国の戸口調査は、その歴史がよほど古いといつてよいであらう。」と語られておられる。

ところが、宗門人別改帳は、検地帳などと違つて、その効用期間も短かく、またその容積も多いために、散逸したものが多く、現在残っているものは、「意外に少ない」のであつて、先生が資料として使われた宗門人別改帳の類が、凡そ二〇カ村、人数増減帳をも加えると冊数にして五百数十余冊というのは、戦災による喪失という不可避の条件をも考え合わせると、個人として蒐集し得る限度といつてもよく、それが地域的に関東地方と中部地方に限られてゐるということがあるとしても、先生の御努力には敬服のほかはない。そして先生は「全国から見れば、正に九牛の一毛に如かないのである、ただししかし、

幾分自ら安んずるところは、サンプリング方式により、また共通点を見出すことに重点を置いて、他に類推を及ぼし得るものがあると思われることである。」と述べられているように、数少ない資料を有効に利用し、共通点を見出すことに重点を置かれ、たとえば、第二編の「第八章 以上七カ村の戸口についての共通性」において、「一、開拓の停止状態にある村々では戸口の増減の少いこと、ただし幕末においては増減がやや目立ってきたこと。」をはじめ四項の共通性をあげて、「以上は、わずか七カ村の例証によつたものであるが、以下表示する数十カ村の場合について見ると、以上述べたところが、一層裏付けられると信ずる。」というような研究態度をとつておられるのである。

しかし、先生の資料の取扱ひ方はあくまで慎重であつて、それはその御性格のしからしめるところでもあるのだが、いやしくも軽々に類推するというようなことは、決してなされない。たとえば第五編の「第二章 片貝村の戸口」のところ、片貝村の安政六年の二歳以下の人口について、「これによつて見ると安政六年三月には二才で文久二年に生き残つていたものは四人で、安政六年に産まれたもので文久二年に生き残つたのは一人もなかったということになる。そうすると……」というように書かれているくだりなどは、先生の面目躍如たるものである。

本研究の特色とするところは、近世農村の人口地理的研究というけれども、単に戸口、人口ばかりでなく、人口ならば性別人口、年令別人口を加え、そうしてその背後にある村の生活にまで及び、人口を中心とした地誌となつてゐる点であつて、それはたとえば、被官の農漁村のサンプルとしての「片貝村の戸口」にもっともよくあらわされている。九十九里浜鰯漁の豊凶に一定の周期があることは、先生の高弟の一人である千葉大学の菊地利夫教授の綿密な研究によつて明かであるが、先生はつとにこれを「抱」の数と結びつけて、考えておられるのである。

特にくわしい研究がなされているものとしては、第三編第一章の西窪村（東京都武蔵野市）の戸口があり、これは昭和一〇年から一五年にかけて、「地理論叢」「地理と経済」「地理」等に発表されたもので、先生の江戸時代農村の戸口研究の根本方針を決めた記念すべき文献である。また第五編第一章の御所平村（長野県南佐久郡川上村）の戸口は、先生が昭和三〇年前後として数年間にわたり、あるいは日本大学の大学院学生を指導しながら、あるいはおひとりで、粗末な商人宿に泊って、夜遅くまで勉強されてまとめられた研究であって、わたくしにとってもきわめて思い出の深いものである。

先生が幽冥境を異にされてから、すでにちょうど二年である。同じく人口地理学を志し、先生に私淑しながら、学問的にはついに先生を継ぐことができなかったわたくしであるが、この論文の文章のはしはしにも、ありし日の先生を偲ぶことができ、まことに感慨に耐えない。次に本書の編名をしるしておく。

第一編 序説

第二編 関東地方（附・甲信）農村戸口概観

第三編 農村戸口詳論Ⅰ―普通の農村

第四編 農村戸口詳論Ⅱ―被官農村並びに被官農村名残の村々

第五編 農村戸口詳論Ⅲ―被官の農山村・農漁村

第六編 結論

A 5 判四八〇頁・非売品（販価三、〇〇〇円）

国土館大学地理学教室刊・発売所帝国書院

（玉川大学教授・国土館大学文学部講師・文学博士）